

中学校

平成 7 年 度

教育研究員研究報告書

教育課題

東京都教育委員会

平成 7 年度

教育研究員名簿（教育課題）

分科会名	区 市 町 村 名	学 校 名	氏 名
進 路 指 導 分 科 会	新宿区	西戸山第二中学校	宮原 誠一
	文京区	茗台中学校	◎ 柴田 伊知郎
	江東区	深川第六中学校	山口 政則
	大田区	大森第一中学校	永久保 佳孝
	世田谷区	八幡中学校	阿部 陽一
	北区	豊島中学校	篠沢 保隆
	練馬区	開進第四中学校	田嶋 隆久
	江戸川区	小岩第二中学校	小山 直久
	青梅市	泉中学校	菅野 博
	清瀬市	清瀬第二中学校	新田 真起雄
生 活 指 導 分 科 会	台東区	忍岡中学校	金子 政則
	杉並区	神明中学校	渡辺 宏
	板橋区	中台中学校	赤堀 栄一
	足立区	江北中学校	高田 勝喜
	八王子市	四谷中学校	○ 冲山 治
	三鷹市	第二中学校	相浦 ゆみ子
	町田市	成瀬台中学校	森田 英之
	小金井市	東中学校	磯谷 律子
	国分寺市	第三中学校	松下 尚嗣
	多摩市	東落合中学校	伴野 浩文

◎ 世話人 ○ 副世話人

担当 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 和田 孝

多摩教育事務所指導課指導主事 原 雅夫

目 次

I	研究主題及び主題設定の理由	2
	「一人一人が個性を生かし、自らの生き方を主体的に考える生徒の育成」	
II	進路指導分科会の研究	3
	「自らの生き方を主体的に考え、自己を生かす能力を高める進路指導」	
1	副主題設定の理由	3
2	研究の方法	3
3	研究の構造	4
4	研究の内容	5
	(1) 実態調査の結果と分析	5
	(2) 3年間を見通した啓発的体験学習	6
	(3) 職場訪問・体験の実践	7
5	研究のまとめと今後の課題	13
III	生活指導分科会の研究	14
	「一人一人が個性を発揮し、社会に適応できる生徒の育成」	
1	副主題設定の理由	14
2	研究の方法	14
3	研究の構想	15
4	研究の内容	16
	(1) アンケート調査から見た生徒の実態	16
	(2) 具体的な実践例	18
	ア 課題解決的な学習活動を重視した指導の工夫	18
	イ 発表活動を通じた生徒相互の評価の工夫	21
5	研究のまとめと今後の課題	24

I 主題設定の理由

国際化や情報化の進展、科学技術の発展、高齢化・少子化の進行、受験競争の過熱化や社会全般が物質的に豊かになるなど、子供たちを取り巻く環境が大きく変化しつつある。このようななかで、子供たちは、人間関係の希薄化や生活体験の不足による様々な問題を抱えている。

例えば、非行問題やいじめ、登校拒否などの学校不適応生徒の増加をはじめ、何事にも無気力で興味・関心を示さず、自己の行為に対し責任をとろうとしないといった無気力、無関心、無責任などの傾向が一般化してきている。

また、自主的、自発的に行動することができず、親や教師の指示を待ったり依存する子供も増加してきている。発達段階によって程度の差があるとはいえ、子供たちが自らの行動を主体的に考え、判断、決定し、責任をもって実行していくことができなくなっている。また、地域・社会において、その意欲、態度、能力を培う場や機会も少なくなっている現状がある。

そこで、これからの学校教育においては、様々な変化が予想される社会に生きる子供たちが、自分の課題を見つけ、自ら考え、主体的に判断し、表現して、よりよく解決することができる資質や能力の育成を重視する必要がある。そのような教育を実現するためには、子供たちの学習意欲を育て、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などを基本とする学力観に立って教育を進めることが大切である。

このような新しい学力観に立つ教育は、これまでの知識や技能を一方向的に教え込むことに偏りがちであった教育から、子供が自ら考え主体的に判断し行動できる力の育成を重視する教育へと、学校教育の基調を変えようとするものである。それはまた、子供一人一人のよさや可能性を生かし高める教育を目指すものである。

そのためには、中学校段階の時期から、心身の調和のとれた発達を図り、現在及び将来の生活で直面する諸問題に対して、積極的に取り組み、自己の能力を十分に発揮して解決していく能力や態度を育成していくことが重要である。

学校の教育活動を通して、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。

以上のような背景や状況を踏まえ、「一人一人が個性を生かし、自らの生き方を主体的に考える生徒の育成」という本主題を設定した。

教育課題部会では、進路指導分科会と生活指導分科会とに分かれ、それぞれの視点から個性を生かした主体的な生徒を育成することに主眼をおき、実践研究に取り組んだ。

進路指導分科会では、啓発的体験学習を通じて、また、生活指導部会では、各教科・特別活動を通じて、それぞれ具体的な実践を通して研究に取り組んだ。

II 進路指導分科会の研究

進路指導分科会副主題

自らの生き方を主体的に考え、自己を生かす能力を高める進路指導

1 副主題設定の理由

中学校の進路指導では、社会の変化に対応し、自己の在り方や生き方を考え、新たな可能性を探索しながら自己実現を図るための基礎的な能力や態度を育成していく「生き方」の教育が課題とされている。各学校においては、進路指導の主旨を踏まえ、様々な活動が展開されているが、まだ多くの課題がある。

現在、多くの中学校が進路指導の一貫として、「職業調べ」「職場訪問・体験」「上級学校訪問」などの「啓発的体験学習」を実施している。そのねらいは、生徒が、これらの学習活動を通して自分の人生について主体的に考えようとする意欲や態度をもつようにすることにある。このことは、自分の人生について生涯にわたって続けられていくものであるが、多感な中学生時代においては、こうした学習が自分の人生について考える契機にもなると考えられる。

啓発的体験学習では、教え込まれる知識・理解だけではなく、自らが主体的に学んで得た「生きてはたらく力」養うことができる。

生徒は、直接体験を通して、成就感・挫折感・満足感などを味わいながら、次の課題を解決しようとする意欲が湧いてくる。

進路指導における啓発的体験学習の意義は、生徒の観念的・抽象的な自己理解や進路情報の理解に、具体性や現実性を与えることにある。そして、生徒の自己理解の明確化、学習や職業情報の収集や検討、進路計画の必要性などの理解にとどまらず、自分自身の具体的な進路の探索に活用していくことができる。

こうした現状を踏まえ、啓発的体験学習の工夫・改善が「自らの生き方を主体的に考える生徒」「自己を生かす能力を高める生徒」を育てることができると考え、上記の副主題を設定した。

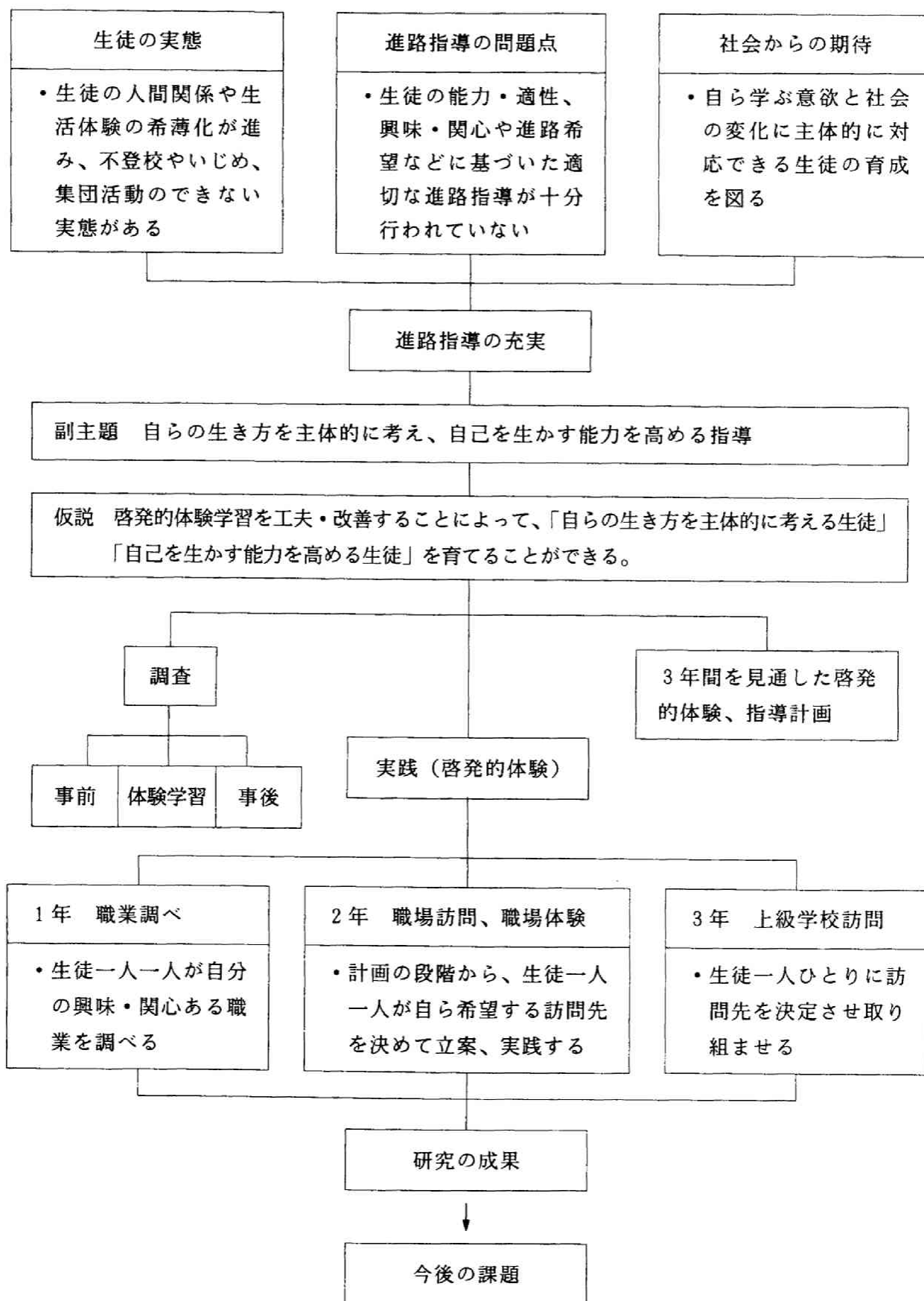
2 研究の方法

本研究では、「自らの生き方を主体的に考える生徒」「自己を生かす能力を高める生徒」を育てることをねらいに、啓発的体験学習の工夫・改善の視点を「生徒一人一人の個の体験」を生かすことに当て、職場訪問、職場体験の実践に取り組んだ。

本分科会では、次のような点に重点を置き研究を進めた。

- (1) 生徒の職業観、進路に対する考え方を「実態調査」で把握する。
- (2) 生徒の主体性を生かすため、活動は個人を中心にして行うように工夫する。
- (3) ロールプレイングを取り入れ、事前の指導を工夫する。
- (4) 評価カード、報告カードを作成し、自己評価・相互評価ができるように工夫する。
- (5) 体験学習の前・後に生徒の意識調査を実施して生徒の意識変容の分析・考察を行う。

3 研究の構造



4 研究の内容

(1) 実態調査の結果と分析

本分科会では、啓発的体験学習を検討する上で、現在の生徒の実態を把握し、今までの啓発的体験学習を工夫・改善することが、自己を見つめ、自己を伸ばし、自己を高め深めるための一助となるのではないかと考えた。

まず、「自己認識」「職業観」「進路」の三つの柱で実態調査を実施した。下記にその分析結果を示す。

ア 自己認識に関する項目

(ア) 性格はこのままでよいか。【グラフ1】

a「全面的に直したい」 b「直したいものがある」という回答を合わせると第1学年で60%以上もあり、これも学年が進むにしたがって増加している。

(イ) 総合して、学年が進むにしたがって、自己の短所を意識し、自己を改善しようとする傾向が見られ、自主性、創造性が減少し、自己の主張も弱くなる傾向がある。

イ 職業観に関する項目

(ア) 将来の職業

学年が進むにしたがって、「具体的」または「あこがれている」ものがあるという回答が減少し、職業に対する具体像が曖昧になってくる。

(イ) 職業選択の基準【グラフ2】

学年が進むにしたがって a「能力・適性」を基準とする回答数が増加している。また、b「高い収入」 c「地位・収入の安定」も増加している。逆に、d「小さい頃からの夢」や e「あこがれ」は減少している。

ウ 進路全般に関する項目

(ア) 進路に悩み

学年が進むにしたがって、「ある」という回答が20%ずつ増加する。特にこの傾向は、女子に顕著に見られる。

(イ) 高校選択の基準

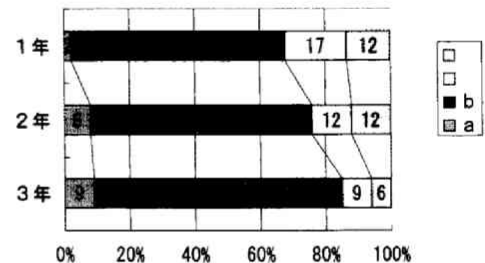
自分の学力と個性にあった学校を基準とする傾向が見られる。この傾向は学年が進むにしたがって増加する。

(ウ) 役立つ情報

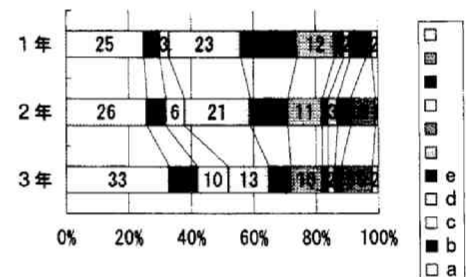
「実際の体験談」「体験入学」がそれぞれ30%を占める。学年が進むにしたがって、「文字による情報」の割合が増加している。

(エ) 総合して、高学年ほど、多くの情報を集め、そのなかから自分自身で決定したという考えが強くなる傾向が見られる。また、その情報も、具体的情報を方法論も含めて集めたいと考えている。

【グラフ1】 自分の性格



【グラフ2】 職業選択の基準



(2) 3年間を見通した啓発的体験学習 *各学年の中心的なねらい ◇工夫改善の取り組み

学年	ねらい	啓発的体験学習の内容・流れ	工夫・改善の視点
1年	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の特徴や興味・関心について考えるようになる ・自分の長所を伸ばし発揮できるようになる ・大人に対してきちんと挨拶したり、言葉遣いに気をつけられるようになる ・家の人と勤労の尊さや進路の希望について話せるようになる ・様々な職業の内容を知り、仕事の大切さがわかるようになる ・希望の職業につくために、何が必要か知ることができる ・日常の学習で目標を決め、努力するようになる 	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">職業調べ</div> <ul style="list-style-type: none"> ・自分を知る ・調べてみたい職業調査 ・質問項目やマナーについて ・職業調べインタビュー ・レポート作成 ・発表会 	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒一人一人の興味、関心に基づいた個別の調査・体験を支援する ◇事前意識調査 <ul style="list-style-type: none"> ・自己理解に関わる項目を中心にして ◇ロールプレイング <ul style="list-style-type: none"> ・地域にある職場の見学や仕事についてのシミュレーションを想定して ◇評価カード作成 <ul style="list-style-type: none"> ・自己評価、相互評価を通して自己理解を深め、働く意義を知る ◇事後意識調査 <ul style="list-style-type: none"> ・自己理解、職業的方向づけ
2年	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の能力や適性について考えるようになる ・自分の長所を生かした行動がとれるようになる ・社会のマナーを知り、大人と適切な対応ができるようになる ・自分の進路計画を立て、学校や家庭を通して相談や検討ができるようになる *身近な職業の具体的な仕事を理解できるようになる *様々な職業の内容や学ぶための制度・機会を知ることができる *自分の将来にとって必要な資料や情報を集められるようになる ・日常の学習や進路に向けて目標を持ち、努力するようになる 	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">職場訪問・体験</div> <ul style="list-style-type: none"> ・将来の希望職業調査 ・体験、訪問希望職業の事前研究 ・職場訪問、体験の事前準備 ・訪問先の選択、決定、連絡 ・職場訪問・体験 ・職場訪問、体験のまとめ・報告 ・全体発表会 	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒一人一人の興味、関心に基づいた個別の調査・体験を支援する ◇事前意識調査 <ul style="list-style-type: none"> ・能力や適性の自覚、職業観を中心に ◇ロールプレイング <ul style="list-style-type: none"> ・電話での応対、訪問・体験時のマナー ◇報告カード作成 <ul style="list-style-type: none"> ・訪問、体験先からの評価を受ける ◇評価カード作成 <ul style="list-style-type: none"> ・自己評価、相互評価を通して職業観を見直し、進路計画を検討する ◇事後意識調査 <ul style="list-style-type: none"> ・自己の変容、職業観の深まり
3年	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の生き方について考えられるようになる ・自分の能力や適性を生かせる進路について考えるようになる ・社会のマナーを身につけ、場に応じた対応ができるようになる ・進路相談などを通して、具体的な進路計画を立てることができるようになる *様々な職業や上級学校の特色を知ることができる *進路の決定にとって必要な資料や情報を集め、活用できるようになる *進路の選択について自分の力で決定できるようになる ・自分の進路希望の実現に向けて目標を立て努力するようになる 	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">上級学校訪問</div> <ul style="list-style-type: none"> ・上級学校の紹介 ・上級学校の調査 ・進路選択の諸条件検討、訪問計画の作成 ・上級学校訪問 ・情報の整理、情報交換 	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒一人一人の興味、関心に基づいた個別の調査・体験を支援する ◇事前意識調査 <ul style="list-style-type: none"> ・生き方、進路の実現へ向けて ◇ロールプレイング ◇計画書の作成 ◇報告カード・評価カード作成 <ul style="list-style-type: none"> ・自己評価、相互評価を通して進路希望や進路計画の見直しを図る ◇事後意識調査 <ul style="list-style-type: none"> ・進路と生き方、主体的な進路選択

(3) 職場訪問・体験の実践（第2学年）

ア 目的

- (ア) 生徒一人一人が、自らの計画にしたがって、主体的に職場体験を行うことによって、自己理解を深め、個性を生かす。
- (イ) 職場体験を通じて、体験先で接する人々に対するマナーや礼儀を知ることを通して社会性を身に付ける。
- (ウ) 職場体験を通じて、自ら情報を収集・活用し、自己の生活設計や進路の計画を見直し、主体的に進路選択することのできる能力を高める。

イ 実施計画

月	職場体験の流れ	生徒の活動	教師の支援活動
7	<ul style="list-style-type: none"> ・事前の意識調査 ・将来の希望職業及び体験希望アンケート 	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの実施 ・アンケートの実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・進路学習や職場訪問への関心を高める援助
8	<ul style="list-style-type: none"> ・体験希望職業の事前学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・職業の具体的な仕事の理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・調査方法のアドバイス ・報告カードの配布
9	<ul style="list-style-type: none"> ・体験学習ガイダンス ・訪問先での質問項目の抽出 ・訪問先でのマナー、連絡の練習 ・訪問先の決定 ・訪問先への連絡 ・訪問日の決定 	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問先での質問の検討 ・ロールプレイング ・訪問先の検討 ・訪問先への連絡 ・訪問日の日時、交通経路、手段、費用の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・質問カードの配布 ・事前の学習を支援 ・訪問先を探す援助 ・依頼状の作成 ・訪問先までの経路、費用等の確認
10	<ul style="list-style-type: none"> ・職場訪問、体験学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・職場訪問、体験学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問先への受け入れの確認
11	<ul style="list-style-type: none"> ・体験学習の報告 ・礼状の作成、発送 ・個人記録のまとめ ・発表会 	<ul style="list-style-type: none"> ・電話連絡 ・礼状の練習、作成、発送 ・報告書のまとめ ・発表会の準備 	<ul style="list-style-type: none"> ・電話連絡 ・礼状の内容、発送の確認 ・まとめの工夫
12	<ul style="list-style-type: none"> ・評価カードの作成 ・自己理解の明確化と職業観、勤労観の深化についての個人記録のまとめ ・事後の意識調査 	<ul style="list-style-type: none"> ・相互評価項目の検討 ・評価カードの記入 ・個人記録のまとめ ・アンケートの実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価カードの配布 ・個人カードのまとめの工夫

ウ 実践における具体的工夫

(ア) 職業訪問・体験実践上の工夫

① 工夫の視点

- a 生徒一人一人の活動を重視し、主体的な体験学習を進めるようにする。
- b 生徒の興味、関心や活動意欲を高めるため、教師主導にならないように配慮する。
- c 訪問先からの感想や評価を、生徒の自己理解、職業観の育成に生かせるようにする。
- d 相互評価の観点や具体的評価項目を生徒自身が考えることにより、活動の評価を主体的に行う態度を身に付け、次時の活動の工夫・改善の視点に気付かせる。

② 学習活動の工夫

- a 事前アンケートを通して、自己理解・職業への関心・情報収集などについての関心を高めた。
- b 保護者の生き方や職業観を調べることを通して、進路学習を身近なものとしてとらえるようにした。
- c マナーや質問内容、応接の仕方について、個人研究・ロールプレイング・体験マニュアル作成（共通する内容のまとめ）という過程で学習の深化を図った。
- d 報告カードで記録をとり、経過を報告し、教師から適切な指導を受けるようにした。
- e 訪問した職場からの評価をその後の進路学習に生かすようにした。
- f 評価カードで自己評価と相互評価を行い、自他を多面的に生かすようにした。
- g 評価を生きたものにするため、相互評価の項目を生徒一人一人が考えるようにした。
- h 依頼状・礼状の書き方、送付を通して、人の接し方を学習活動に取り入れた。
- i 体験学習の成果を確認するため、事後アンケートを行った。

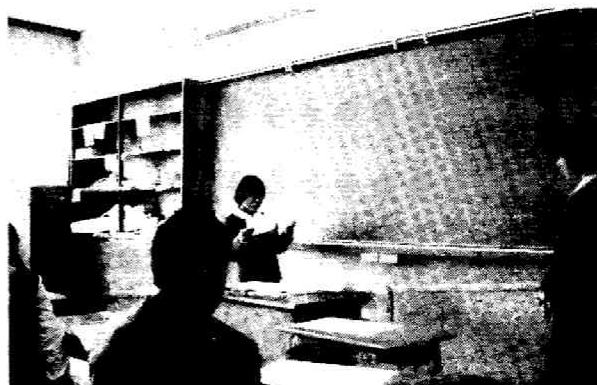
(イ) ロールプレイング

① 目的

ロールプレイングを通して、社会的なマナーとしての礼儀や言葉遣いを学ばせ、職業・仕事の内容への理解と関心を高めるとともに、望ましい職業観の形成を図る。

② 事前の指導と準備

- a 体験する職業の特色や内容、礼儀、言葉遣いを調査した結果をまとめる。
- b 調査内容に基づいて、多様な視点からの質問や調査内容以外の質問を考える。
- c 生徒一人一人の実習場所の一覧表を作成し、生徒を同一もしくは同様の業種別の4～5人のグループに分ける。
小道具（テーブル・椅子等）を用意する。



③ 指導案

○本時の活動……体験先での礼儀・言葉づかい・質問のロールプレイング

	生徒の活動	指導内容	指導上の留意点															
導入	<ul style="list-style-type: none"> 進路委員（進行）が、本時の活動について説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の活動のねらい内容を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒主体の活動が、自主的に展開されるように配慮する。 															
活動の展開	<ul style="list-style-type: none"> 2つのグループで事業者役と生徒役としてロールプレイングを行う。 <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td style="padding-right: 20px;">事業者役</td> <td style="padding-right: 20px;">生徒役</td> <td></td> </tr> <tr> <td>調査内容を発表し</td> <td>○</td> <td>● 順番に</td> </tr> <tr> <td>受け答えをする。</td> <td>○</td> <td>● 質問する。</td> </tr> <tr> <td></td> <td>○</td> <td>●</td> </tr> <tr> <td></td> <td>○</td> <td>●</td> </tr> </table> <ul style="list-style-type: none"> 答えられなかった質問や、礼儀、言葉遣いについてまとめ、基本的なマニュアルを作る。 	事業者役	生徒役		調査内容を発表し	○	● 順番に	受け答えをする。	○	● 質問する。		○	●		○	●	<ul style="list-style-type: none"> 体験先でのマナーや質問内容を考えさせる 質問内容の議事録（経過カード）を各自に配布し、記録させながら進める。 質問に答えられなかった内容・礼儀・言葉遣いについて話し合わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 事前に職業の内容について十分に調査し、業務内容に深く迫る質問や、調査内容以外の質問、又、礼儀・言葉遣いについても考えさせておく。 活動中はできるだけ関与しないが、マニュアルの作成では助言する。
事業者役	生徒役																	
調査内容を発表し	○	● 順番に																
受け答えをする。	○	● 質問する。																
	○	●																
	○	●																
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> マニュアルを確認する。 各グループが問題点や感想を出し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 体験先での礼儀や質問内容をまとめさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 体験学習への関心・意欲と相手先への感謝の気持ちをもたせる。 															

エ 活動の実際

(ア) 職場訪問の例

職場訪問のようすを生徒の体験談・感想から紹介する。

— A 君（運航乗務員） —

自分では、運航乗務員の仕事について十分に調べてきたつもりですが、話を聞いたり、訓練センター内を見学してみて、知らないことが多いことに気がつきました。また、色々なシュミレーターに乗ることができてたいへん貴重な体験ができたと思います。今回の体験学習で、今まで以上に将来について真剣に考えるようになりました。

— B さん（警察官） —

空港内を警察官の人と一緒にパトロールをすることができてたいへん貴重な経験をすることができました。質問は、取調室で行いました。ドラマでしか見るのが無かったのでたいへん緊張しました。私たちが安心して生活できるのも、警察官の献身的な精神のおかげだということを知りました。本当に大切な職業だと思いました。

C 君（仲卸業）

朝の3時に起きて、大田市場に4時に行きました。場内では、野菜のせり見学しました。そして、みかんの荷物を運ぶ仕事を手伝わせてもらいました。色々な人が関わりをもって仕事をしていることがわかりました。その後、魚市場を見学して、事務所で質問を受けてくれました。そこで、競りでの手サインを教えてくださいました。

D さん（保母）

子供と『おにごっこ』や『かくれんぼ』などをして遊んで、第一に思ったことは大変な仕事だと思いました。小さい子（1歳）の食事のお世話をするのも、身の回り事を全てしてあげるのも、本当に大変な仕事だと思いました。

また、大きな子（5歳）とは、縄跳び、フラフープなどをして遊びました。大変疲れましたが、とてもいい経験ができたと思います。機会があれば、もう一度やってみたいと思います。



(イ) 職場訪問先からのコメント

職場訪問の担当者から生徒の体験学習ようすについての感想・意見を頂いた中から紹介する。

・小2の重度の児童につかせてもらいました。発語もなく、介護が必要な部分が多い児童で、コミュニケーションをとるのが難しいと思っていましたが、大変積極的に接し、たくさん話しかけてくれたのでとても良い笑顔で甘えていました。

（都立養護学校）

・将来、パイロットになりたいという夢をしっかりと持たれており、真剣に質問をしたり、話を聞かれている姿には、大変感動しました。

（航空会社-訓練センター）

・朝早い仕事（午前4時）なので体験学習としては大変でしたが、良かったと思います。

（市場-仲卸業）

・最初は突然、飛びついてくる子供たちにどう対応して良いのか戸惑っている様子でしたが、すぐに子供たちの中に入り、たくさん遊んでくれました。

（保育園）

職場からの評価カード

平成7年10月 日

姓

東京都〇〇立〇〇中学校

この度、本校生徒 _____ の職場の体験学習の実施に際し、多大なるご尽力を賜りまして、誠にありがとうございました。つきましては、体験学習の評価をしていただけますと、今後の指導に生かしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

	番号	評価	項目	番号	評価
1	◎	○	△	×	決まった時間に訪問できたか。
2	◎	○	△	×	挨拶・言葉遣いはきちんとしていたか。
3	◎	○	△	×	服装はきちんとしていたか。
4	◎	○	△	×	話の内容は理解できたか。
5	◎	○	△	×	話を聞く態度はきちんとしていたか。
6	◎	○	△	×	仕事の内容を理解できてきたか。
7	◎	○	△	×	学習態度がきちんとしていたか。
8	◎	○	△	×	積極的に実習に参加していたか。

その他気がついたことやコメントがありましたらお書きください。

記入者

※評価していただきましたら、生徒に持たせてください。

・自分の意見や考えを明確な言葉で表現できる方です。立派なグランドホステスとしてぜひ、活躍してください。

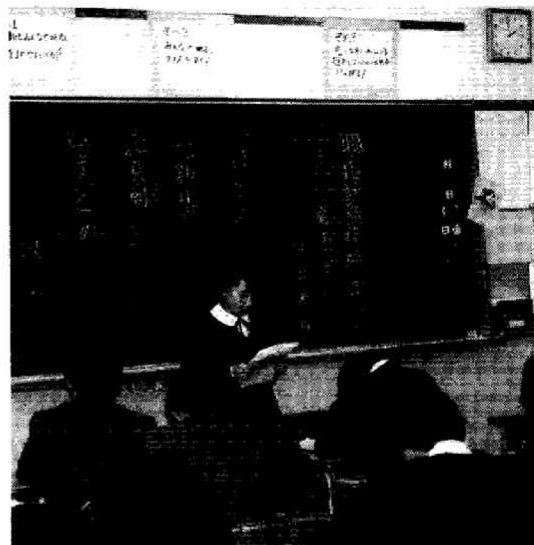
（航空会社）

(ウ) 発表会

今回の体験学習を個人だけのものとせず、学年全体の体験とするために発表会を行った。

〈職場訪問体験学習発表会〉

- ① 発表会の趣旨の説明
- ② 職場訪問報告
- ③ 質問
- ④ 意見交換
- ⑤ まとめ



オ 自己評価・相互評価について

〈工夫〉・事前、体験学習、事後の学習を通して、評価カードを作成し、自己評価及び相互評価をする。

- ・職場からの評価カードを参考にして、自己評価を行なう。
- ・相互評価では、生徒の話合いの中から、評価項目と評価の観点を考えさせたものを取り入れる。

評価カード

2年 組 番 氏名 _____

職場体験学習を終えて（自己評価）

No	項 目	
1	事前学習で今回の目的、意識など理解できていたか。	1. 理解できていた 2. あまりよく理解できていなかった。 3. わからなかったので、先生に質問した。
2	職場体験について家族とどんな話をしたか。	
3	職場体験先を決めるとき、どのような考えで決めたか。	
4	ロールプレイについて、どうでしたか。	1. 楽しくでき、とてもよかった。 2. 難しかった。 3. ちがう分野でまたやってみたい。
5	交渉はどうでしたか。	1. うまくいった。 2. 難しかった。 3. 断われ、職場体験先を変えた。
6	交渉時の相手の人との対応は、どうだったか。	
	(1) 言葉づかいは。	1. 良く出来た。 2. もう少し、工夫すれば良かった。 3. あまりよくなかった。
	(2) あいさつは。	1. 良く出来た。 2. もう少し、工夫すれば良かった。 3. あまりよくなかった。
6	実際、職場実習を行なって、	
	(1) やった仕事の内容は。	
	(2) 苦労した点は。	
	(3) 注意すべき事柄は。	
	(4) 新しく発見したことは。	

No	項 目	
7	実習を終了しての気持ち。	
8	体験で学んだこと。	

発表会や掲示物をみでの感想（相互評価）

1	印象に残った人は誰ですか。（どのようなところ。）	
2	印象に残った経験は何ですか。（どのようなところ。）	
3	発表の方法でよかったものは。（どのようなところ。）	
4	実際に体験したい職場は。	
5		
6		
7		
8		
9		

職場体験学習全体を通しての感想

実習を終了しての	5	4	3	2	1

エ 事前・事後アンケートの結果と分析

(ア) 自己理解

【グラフ1】「自分自身について考えたことがあるか」では、職場訪問や職場体験を行うことによって、自分について考えようとする意欲を持つことになった生徒が、事前より10%増えた。

【グラフ2】で、自分自身について考えた内容の内訳では、自分の能力・可能性・適性・性格について、関心を持ち、自己理解の深化が見られた。

- a 自分の能力について何が不足か考えるようになった。
- b 新たな自分をたくさん発見した。
- c 自分の適性について考えるようになった。
- d 自分の性格について考えるようになった。

(イ) 職業への関心

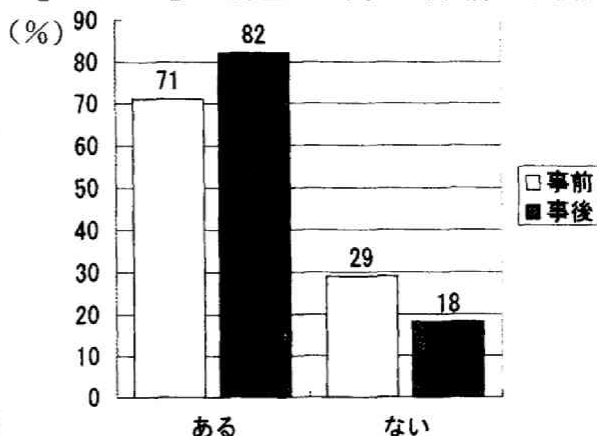
【グラフ3】事前アンケートでは、「身近な職業でも関心がない」と回答した生徒が全体の6割(64%)を超えていたが、事後では、「a もう一度別の所に行ってみたい」「b 進路に関する情報について調べたい」が8割を超え、生徒の関心を高めた。

(ウ) 自己実現への努力

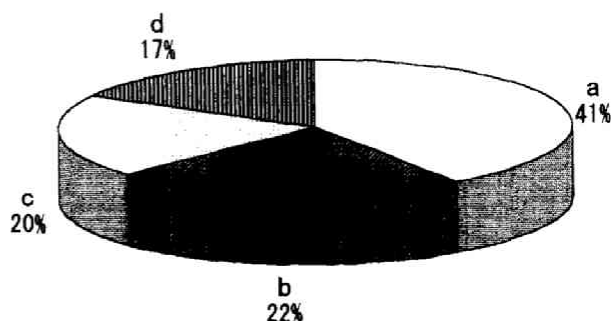
【グラフ4】事前アンケートでは、「普段の勉強で自分自身の目標を決めて努力していない」と回答する生徒が5割(55%)を超えていたが、事後アンケートでは、「a 人生の目標を決めてそれに向かって努力する」「b とりあえず自分の得意なことを発見することに努力する」「c 勉強をがんばる」「d 社会に役立つ人になれるように努力する」「e 進路情報を積極的に収集する」などに取り組む積極性を示した。

{自己理解}「職業への関心」「自己実現へ」の努力などは、この体験学習を通してだけの変容を考えるのは短絡的ではあるが、その大きなきっかけになったと考えられる。

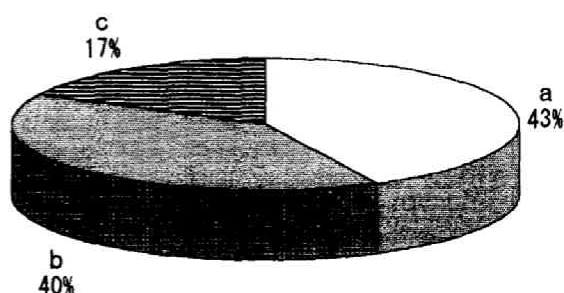
【グラフ1】 自己への関心 (事前・事後)



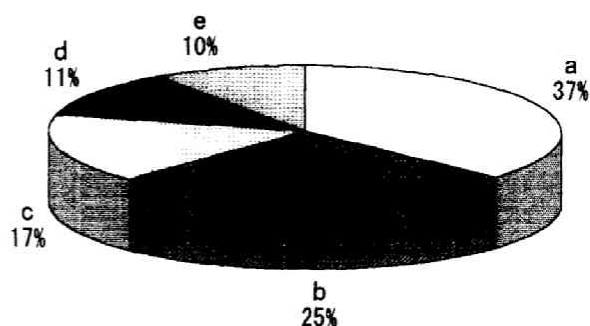
【グラフ2】 自己理解の内容 (事後)



【グラフ3】 啓発的体験後の職業への関心



【グラフ4】 自己実現への努力 (事後)



5. 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究の成果

ア 事前・事後指導の工夫・改善は、自己を生かす能力を高める契機となる。

体験学習の実施に当たり、ロールプレイングによる事前指導を導入したことは、職場訪問により一層の現実性を与え、一人一人が自分の能力と進路について具体的な指針をもつための有効な契機となった。また、事後指導として学級だけでなく学年全体の発表会を工夫したことが、互いのよさを知り、開かれた進路情報に目を向けるよい機会となった。

生徒は「大人扱いされてうれしかった」とか「こんなに大変だとは思わなかった」という感想をもつことができ、自己理解を深めたり職業観を見直すことができたといえる。

イ 一人一人による職場訪問は、自らの生き方を主体的に考える生徒の育成につながる。

各学年で実施した体験学習は、生徒一人一人がその興味・関心に基づき、個人で取り組んだものである。事前の電話での対応から、現地での見学・体験、事後の評価までを一人で行うことにより、自己を見つめ、個性、能力を生かす貴重な体験となった。

身近な地域だけでなく、遠方の職場を訪問した生徒や「今まで以上に将来について真剣に考えるようになりました」という生徒の言葉からも、「大人」としての自分を発見し、緊張と不安の中で「社会」を感じ取ったようすがうかがえる。一人一人による啓発的体験が、生き方を主体的に考え、自分の力で進路を切り拓く生徒の育成に生かされた。

ウ 評価の工夫は、事後の進路学習に生かすことができる。

質問項目の作成や電話の応対マナー、見学・体験時の注意、事後のまとめ等における評価の工夫は、生徒の個性を生かした主体的な生徒の活動を支援する上で役立った。

グループでの話し合い・発表を経て、一人一人が体験し、まとめをする過程で、評価カードや報告カードを活用することが自分の行動を点検し、すすんで体験学習に取り組むきっかけとなった。また（訪問先の担当者）からの評価を受けられたことが、生徒にとっては大きな自信となり、日常の学習を意欲的にすることができると考えられる。

エ 事前、事後の意識調査により、生徒の意識の変容が明確にすることができる。

啓発的体験学習の計画、実施、評価という一連の活動を通して、生徒の進路に対する意識は変容したといえる。事前の意識調査では、自己理解の曖昧さや未熟な職業観、進路情報の渴望等が指摘されたが、事後の調査においては、自己のよさを認め、生かし自分の進路について幅広く考えようとする意識が高まったことがわかった。

(2) 今後の課題

ア 啓発的体験学習で学んだことを他の教育活動や3年生での進路選択にどのように生かすかについて、教育課程全体と関わらせて研究する。

イ 一人一人の体験をさらに充実させるために、個に応じた指導、方法の工夫・改善に努める。

ウ 学校週5日制に伴う土曜日の有効な活用を図り、体験学習についての地域・社会との連携、協力体制を推進する。

エ 3年間を見通した進路指導計画のもと、教職員の共通理解を図るとともに、「生き方」を考える進路指導の充実を図る。

Ⅲ 生活指導分科会の研究

生活指導分科会副主題

一人一人が個性を発揮し、社会に適應できる生徒の育成

1. 副主題設定の理由

現在わが国では、経済の急速な発展と科学技術の進歩、マスメディアの家庭への浸透により生活は非常に便利になり、人々はあらゆる願望や欲求を簡単に満たすことができるようになった。しかし、このような物質的な豊かさの反面、本来の人間性が後退してきているという指摘がある。例えば、人々はボタンを押すだけで画面が消えたり再生できたりすることに慣れきってしまい、人生にふさわしい思い入れや情熱や感動をなくしてきている。そのため、自分から何かを求めて試行錯誤をくり返したり、目標に向かってステップを一つ一つ踏みながら乗り越えていくという体験をすることもなくレールの上を単に走っているという生き方になっているのである。また、核家族の増加、少子化傾向、労働条件の多様化により家族の会話も不足がちとなり、友人との交流や地域とのつながりも表面的なものも多く、互いに傷つくことを恐れたり、面倒なことにはかかわらなくなったりしてきている。

本研究では、このような時代のなかで育ってきた生徒たちが、「主体的に課題をとらえた生活の経験の乏しさからくる様々な問題」と「人間関係の希薄さから見られる様々な問題」を抱えているととらえた。そこで、生徒が主体的に考え、社会に適應し、自分という個性を発揮しながら生きていくことを願い、本副主題を設定した。

2. 研究の方法

仮説

各教科・特別活動の指導において、生徒一人一人が興味・関心を生かし、互いに認め合う工夫をすることにより、個性を発揮し、社会に適應できる生徒が育つであろう。

〈具体的な研究方法〉

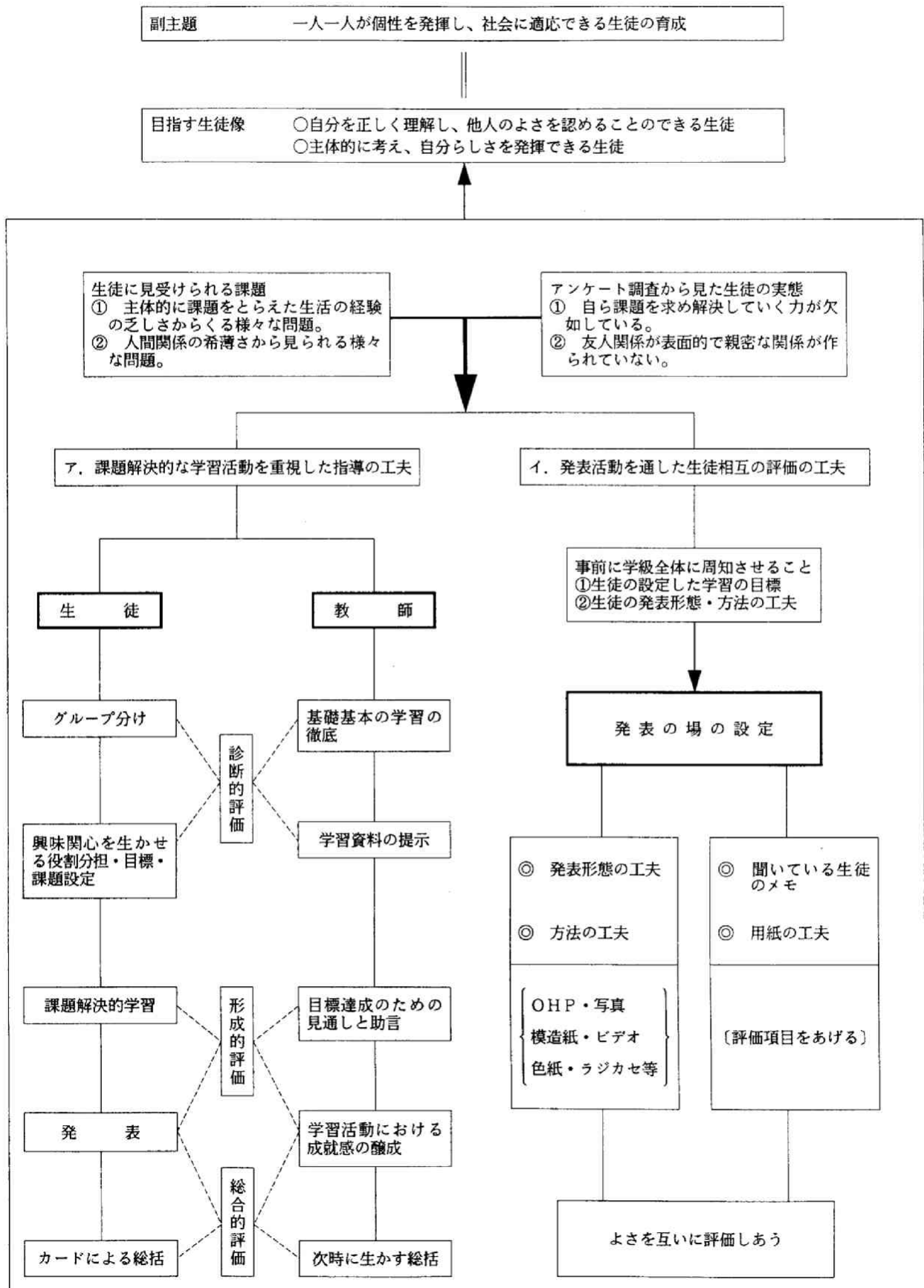
- (1) 生徒の実態調査
- (2) 授業の工夫
ア. 課題解決的な学習を重視した指導の工夫
イ. 発表活動を通した生徒相互の評価の工夫

〈仮説に基づいた授業の展開〉

仮説に基づいた授業を展開するに当たっては、次のような視点をとらえ、実践することとした。

- (1) 生徒が主体的に課題に取り組むという経験が少ないことから、自ら課題を選択し、目標に向かって取り組む工夫をすること。
- (2) 自己決定をする場面をできるだけ多く設け、主体的に課題解決を図ろうとする気持ちを育てる工夫をすること。
- (3) 自分の長所を確認し、のばす工夫をするとともに、とくに、他の人のよさを発見しようとする態度・能力を養い、豊かな人間関係を築こうとする意欲を育てるために、発表の場を工夫すること。

3 研究の構想



4. 研究の内容

(1) アンケート調査から見た生徒の実態

ア アンケート調査のねらい

本調査では、「一人一人の生徒が、他者とどのようにかかわり生活しているのか」「自己の個性・適性を知り、目標をもって自発的に生活しているのか」などの把握をねらいとして実施した。

イ アンケート調査の概要 (対象生徒 第1学年 321名、第2学年 333名、第3学年 354名) (グラフ数字は%)

A. 『学校が終わってから学校の友達と遊ぶことができますか』では、「よくある」「時々ある」と答えた生徒が7割以上で、放課後の遊びを通し、友達とよく交流している。

B. 『休みの日に友達とでかけることができますか』では、上記Aとほぼ同じ結果が得られ、休日も戸外で遊ぶ機会は多い。

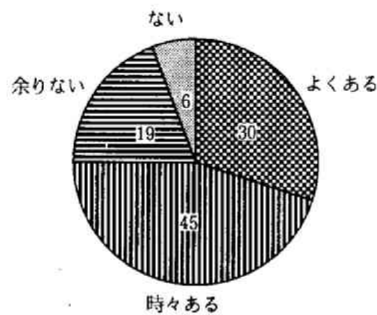
C. 『考え方の違いから友達とけんかをしたことがありますか』では、「よくある・時々ある」と答えた生徒が3割程度で、考え方の違いからけんかをすることは少ない。

D. 『他の人のよいところを進んで学びとろうとしますか』では、7割以上の生徒が、他の人のよいところを学びとろうと努力している。

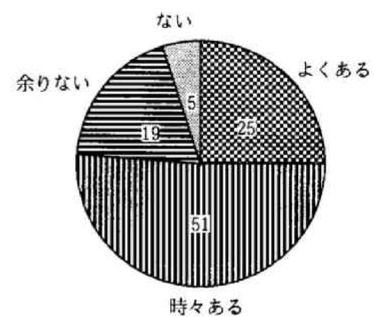
E. 『気の合わない友達と同じ班になったとき、その友達のよいところを認め、仲良くしようと努力しますか』では、7割近くの生徒が、友達のよいところを見つけ、認めようと努力している。

F. 『学級や班の話し合いで、自分の意見を言ったり、質問をしたりすることがありますか』では、「ない・あまりない」と答えた生徒が半数以上で、話し合いの中で、自分の意見を言ったり質問をする生徒は多いとは言えない。

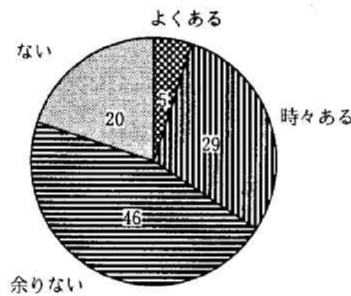
A. 学校が終わってから、学校の友達と遊ぶことができますか。



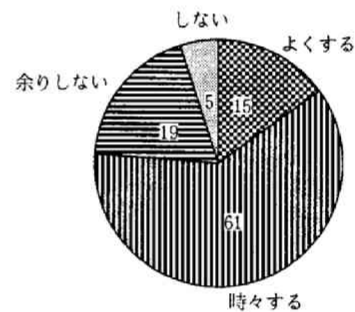
B. 休みの日に友達とでかけることができますか。



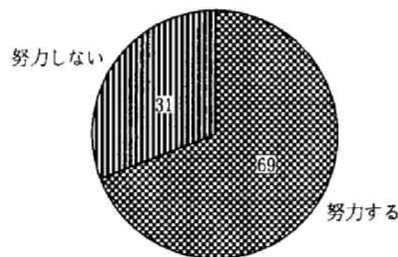
C. 考え方の違いから、友達とけんかをしたことがありますか。



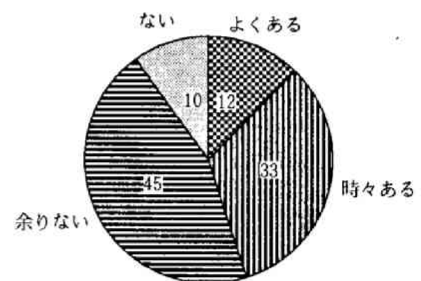
D. 他の人の良いところを進んで学びとろうとしますか。



E. 気が合わない友達と同じ班になったとき良いところを認め、仲良くしようと努力しますか。

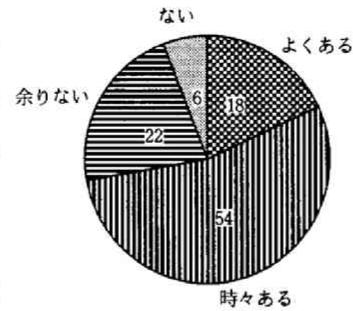


F. 学級や班の話し合いで、自分の意見を言ったり質問したりすることがありますか。

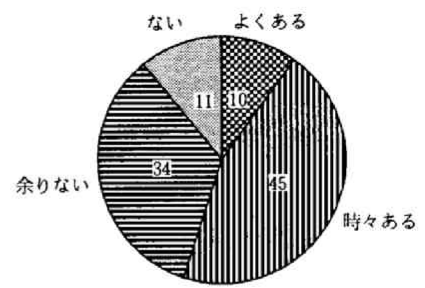


G. 『まわりの人に「～しなさい。」と言われてからすることがありますか』では、まわりの人に言われてから行動する生徒が、7割以上と多くなっている。

G. まわりの人に「～しなさい。」と言われてからすることがあります。



H. 自分では良くないと思っても、友達と一緒にやってしまうことがありますか。



H. 『自分では良くないと思っても、友達と一緒にやってしまうことがありますか』では、半数以上の生徒が、「よくある・時々ある」と答えている。

ウ アンケート結果の考察

アンケートA・Bの結果が示すように、生徒は学校生活の中だけでなく、放課後や休日などを利用し、友達との交流の場を多くもっている。また、アンケートD・Eの結果から、友人関係において、友達のよいところを認め、学びとろうとする努力する生徒が多いこともわかった。

一方、アンケートC・Fの結果によると、多くの生徒が、自分の考えや意見をはっきりと他の人に伝え、話し合いを進めていくことに積極的ではないことがわかる。そのため、自分の考えや意見を交わし合い、その違いによって友達と衝突することはあまりない。このことは、争いごとやトラブルを好まない一面でもあるが、互いに傷つけ合うことを避け、親密な友人関係を築いていかない点でもあると言える。

このように、友達と遊ぶ機会は多く仲よくしようと努力しているが、友人関係は深まらず、表面的なかかわり合いにとどまっている。また、友人関係だけでなく、少子化や核家族化の傾向、地域社会とのかかわりの少なさなどから、現在の生徒たちの人間関係は希薄になってきている。このような状況の中で、生徒が自己のよさを知り、他の人のよさを認めながら友人関係を深めていくことが大切である。

また、アンケートF・G・Hの結果から、自分で考え判断し、行動することが身につけていない生徒が多く、自分の考えをもち、主体的に行動する生徒が少ないと言える。そして、「よくない」と思っても友達と一緒にやってしまうという規範意識の弱さが感じられる。これらは、課題を見つけ、自ら解決していく態度が、身につけていないことの現れではないかと考える。そして、その原因として成長過程で自己決定の場面が十分に与えられず、指示されることを待ち、指示されてから動くことに慣れてしまっているからと考える。

アンケートの結果より、教師は、教育活動を通して、生徒同士が互いのよいところを認めあい、さらに、人間関係を深めていくためにも、自分の考えや意見を発表する場面やグループ討議などの経験を多く与える必要がある。また、主体的に行動する力を身につけるためには、生徒自ら課題を見つけ、解決していく活動の工夫が必要である。

(2) 具体的な実践例

ア 課題解決的な学習活動を重視した指導の工夫 — 選択保健体育「柔道」 —

(ア) ねらい

- ① 自分の体型や運動への適性を考えさせることにより自己理解を促す。
- ② 個人目標である「新しい技を覚える」学習活動を繰り返すことで、主体的に課題を解決する態度を養わせる。
- ③ グループ目標である「お互いに技を教え合う」ことにより、相互理解を深め人間関係を良好にさせる。

(イ) 指導の工夫

- ① 自分の体型や運動への適性を分析させるために資料を個々に指示しその内容にそって自分が学習する技を選択させた。
- ② 課題解決的な学習活動を円滑に展開させるために個別学習とグループ学習の2つの学習活動の場を設定し、それぞれの目標を明確にした。
- ③ 生徒一人一人の興味・関心を生かす支援・助言を行った。
- ④ 学習カードにより生徒自身に学習活動を評価させた。

(ウ) 学習の流れ

年間計画の中に3時間、学習形態と学習活動を課題解決的な学習活動に即した内容で展開させた。(7・8・9時限目の3時間)

7時限目……グループづくり 目標・学習形態・資料の活用法・学習カードの説明
目標達成に向けての課題解決的な学習活動。

8時限目……指示した資料を工夫することにより、個人目標ならびにグループ目標達成に向け課題解決的な学習活動の展開。

9時限目……グループ学習の形態を工夫することにより、グループ目標達成に向け課題解決的な学習活動の深化。

(エ) 評価の工夫

学習カード(資料-1)を用い生徒一人一人がねらいを達成できるよう評価項目を工夫した。

(オ) 考察とまとめ

課題解決的な学習活動を重視した指導を選択保健体育を通して実践した。この実践において(ア)のねらいを①・②・③について以下にまとめる。

- ① 自分の体型や運動への適性を考えさせることにより自己理解を促すことについては、生徒に提示した資料を工夫した。(資料-2)で体型を分類させ、(資料-3)により自らの運動の特性を判断させ、

[資料-1・学習カード・評価項目]

①	目標をもって取り組むことができましたか。
②	資料を有効につかえましたか。
③	先生に積極的に質問ができましたか。
④	新しい技を覚えましたか。
⑤	自分の得意技ができましたか。
⑥	友達から何か教えてもらいましたか。
⑦	友達に何か教えてあげられましたか。
⑧	乱どりで相手に技がかけられましたか。
⑨	グループで協力して取り組みましたか。
⑩	安全に練習できましたか。

自分の適性に合った技を選択させた。このように個々の技への適性を明確にし、課題解決的な学習活動を展開させたことで自己理解を促すとともに、学習活動への興味・関心を高めることができたと考える。

このことは学習カードの評価項目②・⑤の回答が7・8・9時限と進むにつれて上昇していることである。
*以下の表の数値は、学習カードの「よくできた」・「できた」の合計数を%で示している。

資料2

		体 重		
		軽	中	重
身 長	低	ア	イ	ウ
	中	エ	オ	カ
	高	キ	ク	ケ

資料3

		腕力がある	腰にバネがある	足の動きが速い
		手 技 (てわざ)	腰 技 (こしわざ)	足 技 (あしわざ)
ア		① ④	⑧	⑫ ⑬
イ		① ②	⑧	⑭

①背負い投げ ②一本背負い投げ ④肩車 ⑧はね腰
⑫大内刈り ⑬出足払い ⑭大外刈り

	7時限目	8時限目	9時限目
項目② 資料を有効に使いましたか。	76%	92%	92%
項目⑤ 自分の得意技ができましたか。	56%	72%	88%

② 個別学習の場で「新しい技を覚える」ことを目標に掲げたが、この学習では教師が提示した資料に基づき個々に技を選択させ、自らの学習活動により技を習得させるよう試みた(この際、友達に相談せず自分自身で技を習得することを条件とした)。この結果、生徒一人一人に「新しい技を覚える」という課題解決的な学習活動が様々な形で見られた。

この学習活動と関連性がある評価項目④では、以下のように高い数値で推移している。

	7時限目	8時限目	9時限目
項目④ 新しい技を覚えましたか。	88%	92%	88%

③ グループ学習の場で「お互いに技を教え合う」ことについては、7・8時限目は5人1組の好きなもの同士によってグループ学習を展開させた。理由は現在ある人間関係を優先させることで「お互いに技を教え合う」学習活動がより円滑に進むであろうと考えたからである。しかし、以下の学習カード評価項目⑥・⑦からもわかるように7時限目から8時限目にかけては、他の学習カードの評価項目に比べて値が低く、ねらいを達成する上で必ずしも有効なグループ分けにはならなかった。

	7時限目	8時限目	9時限目
項目⑥ 友達から何か教えてもらいましたか。	68%	76%	88%
項目⑦ 友達に何か教えてあげられましたか。	64%	60%	84%

そこで、9時限目では同じ得意技毎にグループを再編成する工夫を行った。その理由は

同一の技でグループを分類することで以下の点で効果的であると考えたからである。

- 互いの技に共通性があるので「お互いに教え合う」ことが円滑に進む。
- 得意技が同一であるため、興味・関心が高まり研究心が向上する。
- 新たな人間関係が生まれる。

この工夫は、8時限目から9時限目にかけて数値が上昇しているようにねらいを達成する上で効果があった。

④ まとめ

生活指導を進める上では、全ての教科・領域で「生徒たちに主体的に考えさせる場（自己決定の場）」を多く与えることが大切である。そのことを通し生徒自らが自己指導の力をはぐくみ、高めて行くことのできる指導がなされなければならない。

これらのことを踏まえて課題解決的な学習活動をより効果的に展開するには以下の点を考慮しなければならないことがわかった。

- 生徒個々の特性を教師が十分理解すること。
- 生徒自身が自己の特性を十分理解すること。
- 生徒自身の目標（課題）設定が妥当であること。
- 生徒に意欲が促進する支援・評価を繰り返し行うこと。

(カ) 評価カードを用いた授業の実証 — 選択 技術・家庭「木材加工」—

課題解決的な学習活動を重視した指導を選択技術「木材加工」の授業を通して実践するなかで、特にグループでの活動に注目をおき、実習・評価カードから得た結果をもとに以下にまとめる。

実習目標や実習の課題については、本時のはじめにグループで話合わせて決定させた。そして、3人を1グループとして互いに意志疎通しやすい環境を決定し、生徒相互の協力や援助の大切さを意識させた上で実習を展開させた。評価・実習カードの項目2、3の結果より、グループでの実習目標や実習の課題が達成されたと自己評価した生徒は7割程度あった。これは、目標や課題を達成するために、生徒相互の教え合いや援助、協力がいかに大切であるかという認識を深めさせたことを示した。また、項目6の結果より、5割以上の生徒が他の人の意見や言葉を実習の参考にしており、主体的に他者から学ぼうとする姿勢や意欲が高かったことを示した。

このように、評価カードの結果から、生徒相互の協力や援助の場面を多く設定できるような学習形態や評価の工夫をすることで、生徒の相互理解を深めさせ、豊かな人間関係を形成しはぐくむうえで有効であったことが言える。

(実習・評価カードの集計結果)

自己評価項目	A +	B 0	C -
2. グループでの実習目標は達成されましたか。	75%	21%	4%
3. 今日の実習でその課題が達成されましたか。	62%	27%	11%
6. 他の人の意見や言葉を実習の参考にしましたか。	52%	42%	6%

A・できた、した B・どちらでもない C・できない、しない

イ 発表活動を通した生徒相互の評価の工夫 ——理科——

(ア) 単元名と小単元名

- ① 単元名…科学変化とイオン ②小単元名…酸・アルカリ・塩

(イ) 小単元の内容

- ① 酸性の水溶液とアルカリ性の水溶液… 3時間
 ② 酸とアルカリの反応…………… 4時間
 ③ 中和反応のときの酸とアルカリの量… 4時間（本研究における実践例）

(ウ) ねらい

- ① 他人が理解できるように自分の考えを表現・発表できる力を養う。
 ② 他の人の発表を聞き、他の人のよさを理解しようとする態度を育成する。

(エ) 指導の工夫

- ① 〈学習目標〉〈実験の目標〉〈発表場面での目標〉〈自分で考えた目標〉を記入させ、目標をもって活動させるよう工夫した。
 ② 「個人の目標一覧」を作成し、班の中で目標を発表させることを通して、他の人がどのような目標をもって活動しているのかを周知させた。
 ③ 一人一人が発表する場を設定した。
 ④ 他の人の発表を聞き、お互いに評価する場を設定した。
 ⑤ 「自己の目標の設定」「発表原稿・モデル図の作成」「他の人の発表の評価」「発表代表者の選出」等、自己決定の場面を多く設定した。

(オ) 学習の流れ

- | | |
|---------|---|
| 第1時 | <ul style="list-style-type: none"> ・目標の提示と設定 ・実験「中和のときの酸とアルカリの水溶液の体積を比べる」 |
| 第2時 | <ul style="list-style-type: none"> ・実験結果をまとめる。実験班ごとに結果を発表する。 ・実験結果をもとに「酸性の水溶液とアルカリ性の水溶液を混合する場合どのようなときに中性となるか」を考える。 ・自分の考えを発表するための発表原稿とモデル図を作成する。 |
| 第3時（本時） | <ul style="list-style-type: none"> ・各班（生活班）ごとの発表会。発表代表者の選出。 |
| 第4時 | <ul style="list-style-type: none"> ・発表代表者の発表。発表活動の評価。まとめの学習。 |

(カ) 第3時の展開

	学 習 活 動	指導上の留意点・工夫
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のねらいについての説明を聞く。 ・「個人の目標一覧」を受けとり、他の人（特に同じ班の人）の目標を知る。 ・発表会についての説明を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○聞いている人が理解できるように自分の考えを発表する。他の人の発表のよいところを見つける。これら2つが本時のねらいである。 ○一覧表と「発表評価用紙」を配布する。 ○班ごとに机を合わせ、発表者の席を設定する。司会は班長が行う。

展 開	<ul style="list-style-type: none"> 各班（生活班）ごとに発表会をする。 一人一人、モデル図を見せながら発表をする。 一人の発表が終わるごとに「発表評価用紙」に記入する。 班ごとに発表代表者を一人選出する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○実験結果をもとに「酸性の水溶液とアルカリ性の水溶液を混合する場合、どのようなときに中性となるか」をモデル図を用いながら発表する（発表原稿とモデル図は事前に作成してある）。 ○発表会が終わったら班長に発表代表者推せん用紙を渡す。
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> 発表代表者が決まったら、班長は代表者の名前を板書する。 次回の発表会の説明を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○全部の班の発表代表者が決定したら、教師が全員に紹介する。 ○次回は、発表代表者の発表を学級全員に聞かせる。 ○班の代表者の発表を聞いて、「発表のよいところ」を見つけ、自分の考えと比較検討するように指導する。

(+) 評価の工夫

発表評価用紙（『化学変化とイオン』のまとめ学習）

- ① 他の人の発表の評価を「発表評価用紙」に記入させた。また、発表のよかったところを積極的に見つけるよう指導し、よかったところを記入させた。
- ② 「評価カード」に、目標が達成されたかどうかを記入させた。

発表者	記入者
-----	-----

発表 の 内容	1. 自分の考えをわかりやすく説明しているか。	
	2. 自分の考えをわかりやすくモデル図に表しているか。	
	3. モデル図に工夫がされているか。	
発表 の 仕方	4. 大きな声で、歯切れよく話すことができたか。	
	5. 聞いている人の方を向いて堂々と話すことができたか。	
	6. 間を上手にとり、時間を有効に使って話すことができたか。	
発表のよかったところ		

(ク) 考察とまとめ

- ① 発表原稿とモデル図の作成に多くの時間をかけていたことから、自分の考えていることを他の人にわかりやすく適切に伝えようとする意欲が感じられた。
- ② 生徒の記入した「発表評価用紙」や「評価カード」から、他の人の発表のよいところを積極的に評価する生徒が多くいることがわかった。（例：原文のまま）
- ・わかりやすい文章、歯切れのよい文章だった。よくまとめてあって聞いていても何の実験結果かということがわかった。

A とてもよい B よい C もう少し

評価カード（『化学変化とイオン』のまとめ学習）

・文の途中で問題提示をしているところがいいと思う。文と図が流れにそってよくあっていたよかった。

・図の色づかいがよく、ピーカーが大きく書いているのでわかりやすい。ゆっくりと話しているのととても聞きやすい。

以上のことから、他の人の発表を真剣に聞き、発表内容や発表のよいところをとらえようとする姿勢が見られることがわかった。

③ 生徒の記入した「評価カード」から次のことがわかった。

・〈実験の目標〉の達成率は、88.2%であった（A良くてきた Bできたに○のついている項目の割合、以下同じ）。

・〈発表場面での目標〉の項目の達成率は、71.8%であった。

・〈自分で考えた目標〉が達成できたと答えた生徒は33名中28名であった。

これらのことから、生徒たちは今回の学習活動において、おおむね目標を達成することができたと考えていることがわかった。

④ まとめ

・発表原稿の書き方の指導、モデル図の描き方の指導、発表の仕方の指導等の発表についての指導を行うことによって、他の人が理解できるように自分の考えを表現・発表できる力を養うことができることがわかった。

・発表を聞くときの観点を指導することで、評価用紙を工夫することによって、他の人の発表を聞き、他の人のよさを理解しようとする態度を育成することができることがわかった。

3年	組 番	実験班	生活班	名前
----	-----	-----	-----	----

○目標を達成することができたか考えてみましょう。テストではありませんので、自分の考えたとおり教えてください。この評価をこれからの学習に生かしていきましょう。

良
く
で
き
た

で
き
た

であ
ま
な
り
か
っ
た

で
き
な
か
っ
た

〈実験の目標〉

1. 先生の説明をきいて、きちんと実験をすることができましたか（前の実験しているのだからなるべく難しくして実験することができたか）。

(A B C D)

2. 結果を予想しながら実験することができましたか。

(A B C D)

3. 実験器具を正しく扱って実験することができましたか。

(A B C D)

4. きちんと記録をとりながら実験することができましたか。

(A B C D)

5. 実験の後始末をきちんとすることができましたか。

(A B C D)

〈発表場面での目標〉

1. 自分の考えを適切に文章に表すことができましたか。

(A B C D)

2. 自分の考えをわかりやすくモデル図に表すことができましたか。

(A B C D)

3. 聞いている人が理解できるように、自分の考えを発表することができましたか。

(A B C D)

4. 他の人の考えを聞いて、自分の考えについても一度考えてみるすることができましたか。

(A B C D)

5. 他の人の発表のよいところを見つけることができましたか。

(A B C D)

〈自分で考えた目標〉

自分で考えた目標は達成することができましたか。

(A B C D)

5. 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

① 「課題解決的な学習活動を重視した指導の工夫」について

ア 個々の能力に応じた取り組みを行い、学習活動への興味・関心を高めるには、自己理解に基づいた自己の適性や活動の特性を理解した目標や課題を設定することが大切である。

イ 物事を深く考え主体的に解決しようとする能力を養うためには、生徒個々の能力に応じた目標設定や参考となる資料準備等、生徒一人一人の課題や目標に応じて教師が支援することが大切である。

ウ 生徒が相互理解を深め課題解決的な学習を展開するためには、互いに教え合い、協力し合って人間関係が深まるよう、グループ学習等を学習形態の工夫することが大切である。

② 「発表活動を通じた生徒相互の評価の工夫」について

ア 発表活動に対して生徒が目的意識をもって、積極的に取り組むためには、生徒一人一人が目標をもつことやその目標が事前に学級全体に周知されるように学習を展開することが大切である。

イ 自分と他の人との関わりを深めるためには、他の人が理解できるように自分の考えをまとめ、表現できるように、発表形態・方法を工夫することが大切である。

ウ 他の人のよい考えを取り入れ、理解しようとする態度がより高まるためには、評価カードの活用等を通して他の人の発表のよさを相互評価するなどの工夫が必要である。

③ まとめ

生徒一人一人が興味・関心を生かし、個性を発揮して学習活動に取り組むためには、生徒が主体的に課題をとらえ解決していく学習活動を展開するとともに、互いのよさを認め合う場の設定を工夫していくことが大切である。

そのためには、様々な教育活動の中に、生徒自身が自己決定し、生活指導に必要な自己指導の力が身に付くよう、学習指導の展開を工夫することが求められている。そうすることによって、生徒相互の人間関係を深め、社会に適應できる資質の育成にもつながることになる。

(2) 今後の課題

① 課題解決的な学習活動の推進については、各教科・領域の単元や教材の内容・方法等、教科・領域の特性に応じた在り方について、さらに研究を深める必要がある。

② 生徒が課題解決的な学習を展開していくためには、教師の生徒理解を一層深めることが、よりよい支援となる。

③ 各教科・領域の学習だけでなく、日常の教育活動の中に、生徒が主体的に発表できる場を意図的・計画的に設定していくための工夫を図ることが大切である。